【郷土史への扉】

霧島市と西南戦争

西南戦争が勃発して、今年で百三十年が経ちました。霧島市の各地でも戦いがありました。戦争に参加し、戦死した人も数多くいます。霧島市と西南戦争はどのような関わりがあったのでしょう。

西南戦争は「明治六年の政変」が発端となります。日本は朝鮮国に国交の樹立を求めますが、日本に不満があり交渉に応じません。そこで政府は西郷隆盛を朝鮮国に派遣し、もし交渉を拒絶されたら武力行使もやむをえないとする方針を打ち出します。このような、西郷や板垣退助らの征韓論に対し、外遊から帰国した岩倉具視や大久保利通らは国内の安定が先決であると反対しました。結局、岩倉の工作によって、西郷の派遣は取りやめになりました。

これによって西郷は職を辞し、鹿児島に帰りました。これに伴い、板垣らも辞職し、旧薩摩藩出身の桐野利秋らも辞職しました。

明治七年（1874）、県内の若者の教育などのため、私学校を設立します。私学校の勢力は県令の大山綱良の協力を得て、大きなものになり、この様子を長州出身の木戸孝允は「鹿児島県はまるで独立国のようだ」と批判しています。

このような批判を受け、大久保は鹿児島県の改革を実行しようとし、明治九年一月に、帰郷という名目で、鹿児島県出身の警察官を内部偵察などのために鹿児島に派遣しました。

一月二十九日、政府は鹿児島県にある武器・弾薬を大阪に移送するため、こっそり船に積み込みました。この勝手な行動に怒った私学校の人々は夜、草牟田火薬庫を襲撃し、武器などを奪いました。この日から連日のように県下で火薬庫の襲撃が行われました。これを聞いた西郷は「しまった」と嘆いたそうです。

二月三日、偵察に来ていた警察官を一斉に捕縛しました。西郷を刺殺にきたという疑いからです（視察の勘違いともいう）。

十三日には大隊の編成が行われ、明治十年（1877）の二月十五日、数十年ぶりの大雪の中を、篠原国幹率いる第一大隊を先頭に、順次熊本方面へ出発し、西南戦争がはじまりました。

二月二十一日薩軍は熊本城を完全に包囲しました。夜半から翌朝にかけて熊本城を攻撃しました。しかしこの間の二月十九日には征討の命令が出されました。政府は電信による通信で、すばやい対応を行ったのです。

薩軍は熊本城を攻撃するも、なかなか攻め落とせず、結局熊本城は最後まで落ちませんでした。最初から苦戦を強いられ、三月になると、吉次峠・田原坂・植木などで激戦が繰り広げられました。

十三日には政府艦隊が鹿児島に入港しました。このとき、国分の敷根火薬製造所が破壊されました。

四月・五月と熊本を中心に戦闘が行われ、時が過ぎるにつれ鹿児島県内での戦闘が増えていきます。薩軍は六月の初めには拠点としていた人吉での戦いに敗れます。ここから、官軍は大口、川内、宮之城、栗野、横川方面を攻略することとなりました。

七月一日、横川で戦闘が始まりました。六日には国分から霧島大窪、牧園方面、七日には国分、春山原、襲山の妻屋、さらに八日に霧島の大窪で再び戦いがあり、十一日には国分の永迫、上之段、翌日は上之段から牧之原、十四日には豊後坂、佳例川が戦場になっています。

八月三十日朝、西郷は吉松の山口重保宅を出発し、栗野を経て同日午後には二石田から深川方面にかけて二十時間に及ぶ激戦中の横川を通過しています。この時両軍の戦死者は六十余名にのぼっています。横川通過後は踊郷（牧園）の霧島温泉駅近くの前田万兵衛方に宿泊し、深夜ひそかに出発しました。浜之市に出ようと考えましたが、国分、加治木は官軍が占拠していたことから、赤水、岩穴、三縄を通過し、姶良町の山田に入り、三十一日蒲生にて宿泊しています。翌、九月一日に鹿児島に到着し、翌日城山に入りました。

九月二十四日、午前四時に城山総攻撃が開始されました。その三時間後に城山は陥落したのです。

文責＝坂

南洲翁宿営之跡碑（牧園）